

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.17 (2014年3月号) ◆

大雪に驚いた二月でしたが、皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。本年も早くも三月となり、年度末のお忙しい時分かと思いますが、本研究会にもお運び頂ければ幸いです。また、今月末には最新号として『Intelligence』14号も刊行の運びとなる予定です。このニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【第82回20世紀メディア研究会】(1月25日(土)午後2時半～5時)

・賀茂 道子「占領初期GHQ民間情報教育局の対共産主義政策—天皇制に関する事例を中心に」は、GHQが占領初期にどのように共産主義者を利用したのか、ラジオ番組やニュース映画などにおける天皇制論議を中心に、宣伝工作と世論の喚起という二つのパターンでその積極的利用策をあきらかにされました。

・紙屋 牧子「占領期からポスト占領期の日本映画における「女」と「キリスト教」の表象」は、戦争直後に流行した『肉体の門』などの「パンパン映画」と、敗戦直後から復興期にかけて流行した『山猫令嬢』などの「母もの映画」に焦点をあて、実際にその一部を紹介されながら、その連動性を社会的文脈から検証されました。

・笹川 隆太郎「占領初期の新聞報道をめぐって—小報告二題」は、『中部名古屋新聞』の資料中にあった「検閲のしおり」の資料紹介、および「プロパガンダ写真としての昭和天皇とマッカーサーの初会見時の写真」とテーマで、三枚の写真をめぐっての真相を説き明かされました。

※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

● 次回の20世紀メディア研究会は、今月3月29日(土)で、押田信子さん、中生勝美さん、有馬哲夫さんをご報告の予定です。その後は、4月26日(土)、6月28日(土)を予定しております。なお、5月は31日(土)に第六回諜報研究会を開催予定です。また、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】 [敬称略]

村嶋智恵子編『父帰之が残した本—紙屑にはしたくない—』(STEP制作)は、大正期の『大阪毎日』の社会部記者・村嶋帰之の蔵書リストをまとめた小冊子。村嶋帰之は賀川豊彦と親交が深く、大正期の労働問題、貧困、売春などの社会問題に関する記事を書き、大きな反響を呼んだ。大正期の大阪のカフェーの実態を描いた著書も有名。ジェフリー・

ハーフ『ナチのプロパガンダとアラブ世界』（岩波書店）は、第二次世界大戦中に、中東で展開されたナチスのプロパガンダを新たに描き出した書。大石裕『メディアの中の政治』（勁草書房）は、自衛隊派遣、水俣病、沖縄問題など戦後のメディアを理論的に分析した書。佐藤卓己『災後のメディア空間』（中央公論社）は、新聞の時評などを中心にまとめた本。

【コラム】

311 から 3 年がたった。7 日の東京新聞は「復興住宅 完成 3% だけ 公共事業増で入札不調」と、被災地の矛盾を伝えている。「用地取得が難航していることに加え(略)安部政権による公共事業関連予算の増額が人手不足に拍車をかけ、住民の生活再建を阻んでいる」と。建設需要が急増、資材が高騰し、落札上限価格で「赤字になる」として入札不調が続出しているというのである。被災地で地方議員をつとめる高校時代の同級生に話を聞くと、金も人も流入しているが、生活再建は後回し、「震災以前の原状復帰」という条件が災いしてプロジェクトの頓挫も相次いで、陳情に頭を悩ませているという。復興は 311 に追いついていない。

[3 月 7 日付文責 : 川崎賢子]